

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
氏名 王 シュイン

【論文題目】 明清白話小説の親族呼称語の研究—〈醒世姻縁傳〉を中心として

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

王姝茵氏が提出した博士学位請求論文「明清白話小説の親族呼称語の研究—《醒世姻縁傳》を中心として」（約11万字）は、論の展開が「総説」の如き手法の為、審査員には読みづらく平坦なものにしか映らなかった点が惜まれる。ただし、この欠陥を差し引いても、今後、学界で議論となる新知見があるため、審査委員会は、本研究科に提出する学位論文として博士学位にふさわしい内容であると判断する。

①本論文の位置付け

本論文は、清初期成書の《醒世姻縁傳》を中心にすえ、その前後の資料をコーパスの用例に基づいてはいるが、当時の原文にも逐次確認し、親族間の呼称語の意義変遷を検証している。これまで、近世漢語において系統的、網羅的に詳細な変遷を明らかにされたことは無く、学界への貢献は少ないと思われる。

②本論文の示す新知見、独創性

一つ目は、明代清初期において、呼称語の各語彙が多義であった所から清中期には一斉に意味の「単純化」への方向へと進んだ。単なる意義変遷ではなく、どの語も一貫して「単純化」の方向へ進むと断言した点である。これは、学界では初めての意見と思われる。例えば、“爺”“爹”“哥哥”“老公”“大娘”“婆子”“姑娘”“姐姐”“大嫂”“奶奶”等、各語彙の多義性を一つ又は二つへと収斂してゆく点を説明している。

二つ目は、第二章における各呼称語に対する意義の変遷交代する時期及びその理由を明確に指摘した点にある。今、例として第二章第七節“奶奶”を挙げる。これは、近世漢語では非親族間で「奥様、奥さん」の如く用いられる事が多い。ただ、現代漢語では親族間で「祖母、婆様」の如く用いる。いつ頃から「祖母、婆様」で用いられるのか？清初期成書の《醒世姻縁傳》では「祖母、婆様」の用法が存在するのか？因みに、左並旗男（2004）訳では、“奶奶”を全て「奥様、奥さん」にしている。近世漢語の権威である白維国（2011）《白話小説語言詞典》の“奶奶”でも「祖母、婆様」の意義項では、清代中期以降の用例しか挙げられていない。《醒世姻縁傳》からの挙例を敢えて避けていると見られる。たとえ近世漢語の権威であっても清初期成書では“奶奶”の意義項には慎重を期していたと思われる。この点、王姝茵論文は、“奶奶”が「奥様」ではなく「祖母」と解釈せざるを得ない理由を次のように主張する。

晁七が小璉哥に対して、自分の妻にも叩頭のお辞儀を強要するセリフに用いる“奶奶”である。これは、役人ではなく一介の平民（晁七）が自分の妻に対して、（非親族間である）地位の有る官僚、役人の妻を指す意味での「奥様」は使用できない。自分の妻は、「親族間」であり、そうならば意味は自ずと「婆さん」になる。“奶奶”は、親族間では「祖母、婆さん」の意味で、非親族間では敬称「奥様」の意味になるという規則が、根底に存在するからである。ただ、家族制度の強い中国では「祖母」の立場も多くは十分に敬われる存在ではある。これと同様の主張が他の呼称語（“爺”“爹”“哥哥”“老公”“大娘”“婆子”“姑娘”“姐姐”“大嫂”）においても展開されている。

③本論文の評価等

所属学会での評価は、これまでの3年間で、本論文に関しての口頭での研究発表は、書類選考で毎回合格している。国際会議1回、日本国内の全国大会4回、地方（九州支部）大会5回である。研究論文は、大学紀要に相当するもの計3編である。なお、“奶奶”の論考は今年の全国大会で報告予定としている。

【最終試験の結果の要旨】

王姝茵氏が提出した学位請求論文「明清白話小説の親族呼称語の研究—〈醒世姻縁傳〉を中心として」を基に平成31年1月11日12:55より15:00まで、文法棟小会議室にて審査委員全員（4名）出席のもと審査委員会を開催し、修正論文に基づく最終試験を実施した。

本人より学位論文の主旨（研究目的、方法、成果など）について説明された後、各審査委員との質疑応答があった。親族呼称語について、「意味の単純化」が大きな歴史の流れであると主張し、各語彙をまとめたもので、説得力及び日本語表現力の点にやや難があるが、当時の木版の原文を一つ一つ検証し、また、大きな新知見も認められた。

この結果、申請された学位論文が博士学位授与に十分値する労作であると認識され、審査委員会は、全会一致で最終試験を合格と判断した。

【審査委員会】

主査 植田 均
委員 朴 美子
委員 シンジルト
委員 渡辺 直土